

## 俳句通信

特別作品25句 宇多喜代子

## 「野山の色」

特集

## 〈実力作家20句競詠〉①

大牧 広	「秋風や」
安西 篤	「涅槃西風」
山本洋子	「夜の秋」
池田澄子	「百花」
今瀬剛一	「扇着」
田島和生	「夕月夜」
酒井弘司	「鳥の目」
宮野孝夫	「機の日」
尾池和夫	「秋澄む」
山田貴世	「風の記憶」
鈴木しげを	「八月米」
向田貴子	「秋へ」
西池冬扇	「鳥虫戯画（其ノ波）」
波戸岡 旭	「蝶頰」
本井 英	「こもろ日盛俳句祭など」
松尾隆信	「からすうり」
横澤放川	「白さはも」
名村早智子	「揺れながら」
西村和子	「草々」
今井 聖	「脱穀埃」
井上康明	「山の日」
三村純也	「盆過ぎまで」
森田純一郎	「屋形船」
稲畑廣太郎	「山陰」
岸本尚毅	「半分」
小川艇舟	「人肌恋し」
山田佳乃	「スケッチ」



## 【3人競詠20句】

根橋宏次 「ままこのしりぬぐひ」

中村幸子 「扇置く」

小林篤子 「夜の秋」

## 【精鋭作家30句】

木内憲子 「開く戸」

柳生正名 「すみふるす」

## ●作品●

田中水桜・下鉢清子・雨宮抱星・船越淑子・檜 紀代・永方裕子・須原和男・茨木和生・広瀬恵美子 ほか

青山 丈50句「夏から秋」



子規よりも多くの柿を食ひ得しか

相生垣瓜人

## 柿

兵庫県北部の円山川はコンクリート護岸が無く、自然の風景がゆったりと広がり好きな釣り場である。

十一月のよく晴れて冷え込んだ朝、河川敷の畑の中を歩いて水際に立つと対岸の紅葉が水面に映え、微かな風がさざ波を走らせていた。急ぎ釣り支度をした。

暫くして、背後から嘎れた声がして、リヤカーを引いた小柄なお年寄りがいた。「釣れるかなあ」「これからです」と答える。「クマがあそこにおるんで気いつけや」と言う。指差す木の上に黒い塊がある。昼間は動かないが夕方から降りてきて、あの鈴生りの柿の木に登ると言う。釣りはこれからと言う時であったが、急いで片付けた。

次の週、クマは居るかと思つて見た。数本あった柿の木は伐採され、すっかり冬景色になっていた。

絵・文 杉原武弘



イラスト 田中丸葉子

## 団栗どんぐり

団栗の寝ん寝んころりころりかな

一茶

団栗の己が落葉に埋れけり

波辺水巴

雀あて露のどんぐり落ちる落ちる

橋本多佳子

戦後すぐの、まだ食糧難が続いていたころ、団栗の粉の配給があった。黄色っぽい粉だった。

「これ、どうしたらいいのかね」母はそういいながら団栗を作ってくれたが、口にするのと淡いというのか、えぐいというのか、ひどい味で、すぐに捨ててしまった。

しかし、隣りの織物工場の裏手の6畳一間の小屋に住んでいた、引揚げ者の母と男の子が、その粉を大事にしているのを見て、団栗粉の悪口をいうのはやめた。


その頃のことか、父が町会議員にトップ当選したとき、家の前に共産党の者がやってきて「この家には米俵が山と積んである」と演説していった。「なにいったんだらう」と母はいった。家には米俵がひとつあるだけだったのだ。米櫃に米がなくなると、母はよくスイトンを作ってくれたが、空の米櫃をのぞくと、米がなくても黒っぽい殺象虫がいっぱいいいたものだ。

(大崎紀夫)

野山の色

宇多喜代子

山積の虫 凶鑑より虫のこえ  
さつきより好みの虫が寝入り端  
年寄の頬の額の秋日和  
どんぐりの二つ三つが荷厄介  
手に荷物持たぬ日もあり草の花  
忙中閑終日ゆれて猫じやらし



今回はへ実力作家20句競詠のページを拡大し、  
27人の俳人に寄稿して頂きました。  
他のページの作品を含め、ここに俳句世界の  
現在の風景のひとつが見えてくるかもしれません。

# 特集へ実力作家20句競詠①

大牧 広	酒井弘司	西池冬扇	名村早智子	森田純一郎
安西 篤	菅野孝夫	波戸岡 旭	西村和子	稲畑廣太郎
山本洋子	尾池和夫	本井 英	今井 聖	岸本尚毅
池田澄子	山田貴世	松尾隆信	井上康明	小川軽舟
今瀬剛一	鈴木しげを	横澤放川	三村純也	山田佳乃
田島和生	向田貴子			



前列右から 荒木氏、折原氏、辻内氏  
後列右から 星野氏、藤本氏、小島氏

ゲスト 荒木 甫・折原あきの  
小島 健・辻内京子  
ホスト 星野高士・藤本美和子

編集部 超結社句会第41回目です。ゲストは「鴨」同人の荒木甫さん、「港」同人の折原あきのさん、「河」同人の小島健さん、「鷹」同人の辻内京子さん、ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さんです。遠慮のない意見交換をお願いします。

高士 では、高句句からまいります。4人がお採りになっています。

太刀魚の骨にもありし光かな

（兼の健美）

健 見たことないんで分らないんですけど、太刀魚の光が骨にもあったということ、しいていえば「……し」という過去形が問題になるんだと思うんですけど。「骨にもあった」という発見というか、本当か嘘かはどちらでもいいと思います。虚実のあわいに文芸の本質がある、と近松門左衛門も言っているということもありまして、惹かれました。

あきの 太刀魚自体は触るとその光が手について手まで光りますけど。その手で骨を触って光るのかなとか、いろんなことを考えさせられて面白い俳句になったなど。